論　文　ニダバ (*Nidaba*) 33(2004), 119-128

古典ヘブライ語 Niph'al 語幹の Reflexive 用法及びその関連用法についての分析

三　上　宗　一

1．本稿の目的

本稿では、古典ヘブライ語 Niph'al 語幹の諸用法のうち、特に Reflexive 用法およびそれと関連するいくつかの用法を取り上げ、動詞語幹そのものが表わす動作の意味と、文全体が表わす出来事の意味とのかかわりについて若干の検討を行なうことを目的とする。扱う用法は Reflexive の他、Tolerative, Reciprocal, Benefactive の計４つである[1)]。

2．他のセム語におけるNiph'al 語幹の対応形式

Niph'al 語幹は動詞語根に n- の要素を付加することによって形成される語幹である。対応形式は他の若干のセム諸語にも見い出されるが、アラム語には存在せず、エチオピア系諸言語を中心とする南西セム語でも稀にしか出現しない[2)]。本来セム諸語における n- 接頭語幹の基本機能は Medio-Passive[3)] もしくは Passive-Reflexive[4)] であると言われているが、東セム語に属するアッカド語では他動詞のN語幹（ Niph'al 語幹に相当）は受動、自動詞のN語幹は Ingressive の意味を表わし、 Reflexive の意味で用いられている例は稀とされている[5)]。一方でエチオピア系諸言語や現代南アラビア語などのように、使役などの方向に機能を発展させたと思われる言語も見受けられる[6)]。

3．Reflexive 用法およびその他の関連用法

3．1．Reflexive 用法

ヘブライ語における Niph'al 語幹の用法は個々の動詞ごとに様々であるが、大多数の動詞において共通するのは、直接目的語を取らず[7)]、受動、 Middle 、 Reflexive 等の意味を表わすという点である。 Waltke & O'Connor (1990) はその機能を大きく５つにまとめている[8)]。

Middle

Passive

Adjectival (simple, ingressive-stative, gerundive)

Double-Status (reflexive, benefactive, reciprocal, tolerative, causative-reflexive)

Denominative

詳細は省略するが、この分類にもあるとおり基本的にヘブライ語の Niph'al 語幹は Middle（ここでは他に動作主の存在を想定しない自然発生的な出来事を表わす用法を指す。）や受動、 Reflexive や相互など、ヨーロッパ系諸言語における再帰動詞構文と似た意味を表わすことができる。（ただし、ヘブライ語にはいわゆる専用形式としての再帰代名詞は存在せず、他動詞が再帰代名詞を支配する統語的な意味での再帰構文も基本的にはほぼ存在しないと言ってよい[9]。）ここで Niph'al 語幹の機能の一つにあげられている Double-Status とは、以下で見るように本来的には被動者であるはずの主語に、同時に動作主性が認められる場合の用法を指すものであるが、これは他のセム諸語と比べても発達のあとを示している。 Reflexive を例にすると以下のような用法である。

נראה (*appear*), נודע (*make oneself known*)

1) wāʾērāʾ ʾel ʾaḇrāhām ʾel yiṣḥāq wəʾel yaʿăqōḇ bəʾēl šaddāy
and I appeared toward Abraham ... as God Almighty
ûšəmî YHWH lōʾ nôḏaʿtî lāhem
but as for my name Yahweh I was not known to them
そして私はアブラハムに、イサクに、そしてヤコブに全能神として現れたが、私の名ヤハウェに関しては私は彼らに自分を知らせなかった（知られなかった）。 (Ex.6:3)

最初の動詞は ראה (Qal: *see*) の Niph'al 語幹で「現れる」の意味を持ち、２番目の動詞は ידע (Qal: *know*) の Niph'al 語幹で「知られる」もしくは「自らを知らせる」の意味を持つ。２番目の動詞 נודע (Niph: *be known*) は、文脈上受動としても Reflexive としても解釈し得るものである。そして最初の動詞 נראה (Niph: *appear*)も、ここでは Reflexive 的に解釈されるものの別の箇所ではやはり「見られる」「見える」など、受動や自発の意味での使用例がある。このように、多くの Niph'al 語幹動詞は文脈によって異なった文法的意味を持つことができる。（どのような文法的意味を持ち得るかは動詞の持つ語彙的な意味によってもかなり異なる。）少なくとも上例での主語（１人称＝神）はすでに単なる被動者ではなく、「現れる（＜自ら見られる）」存在、もしくは「自分を知らせる（＜自ら知られる）」存在、すなわち意志を持った動作主として解釈することが可能である。このように、主語が動作主性を獲得している点が Reflexive 構文の最大の特徴である[10]。

語幹対立の観点から見ると、最初の動詞 נראה (Niph: *appear*) には基本語幹として ראה (Qal: *see*) があり、他にも使役語幹として הראה (Hiph: *show*) がある。２番目の動詞 נודע (Niph: *be known*) にも基本語幹の ידע (Qal: *know*) の他に使役語幹として הודיע (Hiph: *make known*) がある。これらの動詞に関する限り、［基本（能動）動詞］－［受動／再帰動詞］－［使役動詞］というきれいな図式を描くことが可能であるが、態対立の構図は動詞ごとにみな異なる[11]。しかも以下で見るように、基本語幹と派生語幹とでは表現しようとする

出来事の動作態的側面において相違が見られる場合がある。

3．2．Tolerative 用法

まずは文献において Tolerative 用法とされている動詞の用例を具体的に見ていこう。

נדרשׁ (*let oneself be consulted*)

2) hălidrōš ʾōtî ʾattem bāʾîm ḥay ʾānî ʾim ʾddārēš lāḵem

if I am inquired for you

nəʾum ʾăḏōnāy YHWH

お前たちは私を求めるために来たというのか。我が命にかけて、お前たちの求めに応じることはしない。と、主ヤハウェのお告げである。(Ez.20:3)

נזהר (*take warning*)

3) ʾēṯ qôl šôpār šāmaʿ wəlōʾ nizhār dāmô bô yihyeh

but he didn't take warning

彼は角笛の音を聞いたのに警告を受け入れなかった。彼の血は彼自身にその責任がある。(Ez.33:5a)

נוסר (*let oneself be corrected*)

4) wəʾim bəʾēlleh lōʾ ṯiwwāsərû lî wahălaḵtem ʿimmî qerî

and if by these you won't be corrected by me

しかしもしこれらのことによってもお前たちが私からの懲らしめを受け入れず（私に懲らしめられず）、私に反抗して歩むならば、(Lv.26:23)

נמצא (*let oneself be found*)

5) niḏraštî ləlôʾ šāʾālû nimṣēʾṯî ləlōʾ ḇiqšunî

I was found to those who didn't seek me

私は求めなかった者たちに自分から願いを聞き入れ、私を捜さなかった者たちに自分から姿を表わした。(Is.65:1)

נעתר (*grant entreaty*)

6) wayyeʿtar yiṣḥāq laYHWH lənōḵaḥ ʾištô kî ʿăqārāh ʿhwʾ(ʿhîʾ)

wayyēʿāṯer lô YHWH wattahar riḇqāh ʾištô

and granted entreaty *for him Yahweh*

そしてイサクは妻のためにヤハウェに祈った。彼女が不妊だったからである。そして

ヤハウェは彼の願いを聞き入れ、妻リベカは身ごもった。(Gn.25:22)

意味的には追求や警告、さらには知覚の動詞が大部分を占めているのがわかる。そしてやはり Reflexive 構文と同様主語には動作主性が見られ、"*allow something to happen to oneself*" 等のニュアンスを帯びているとされる[12)]。

とはいえ統語的には Tolerative 構文は通常の Reflexive 構文と何ら異なる所がなく、その解釈も主として前後の文脈から判断するしかないのが実情である。そのため Tolerative 構文を Reflexive 構文から区別する明確な統語的特徴を指摘することは困難である。

他方、上記構文を動作態の側面から見ると興味深い現象が見られる。上記の動詞の基本（能動）語幹は単純に警告、追求等の動作を動作主側が被動者側に向けて行なう意味を表わすのに対して、 この Tolerative 構文は、単にその動作が向けられた被動者の側を主語に立てただけの受動構文などでは決してなく、むしろそのような警告、追求、懲戒などの働きかけを主語が受け入れたか否か、その働きかけに主語が（たとえ消極的にであれ）応じたか否かを問題にしている。基本語幹構文では必ずしも警告や追求の働きかけが被動者に到達している必要はなかったが、対応する Niph'al 構文は、単に警告されただけでは成立せず、その働きかけに応じて主語が実際に行動した時に初めて成立する。言い換えると、基本語幹構文が表わしている状況と Tolerative 構文が表わしている状況は、動作態的側面において必ずしも同一ではないのである。この点については後でもう一度検討する。

3．3．相互的用法

相互的用法も Reflexive 用法と関連の深い範疇である。

נלחם (*fight*), נועץ (*consult together*)

7) ûmelek̲ ʾărām hāyāh nilḥām bəyiśrāʾēl wayyiwwāʿaṣ ʾel ʿăb̲ād̲âw
and king of Aram was fighting against Israel and he consulted to his servants
アラムの王はイスラエルと戦っていた。彼は僕たちに相談して言った。(2K.6:8)

נועץ (*consult together*)

8) wəšōmərê napšî nôʿăṣû yaḥdāw
and watchers of my soul consulted together
そして我が魂を見張る者たちがともに協議した。(Ps.71:10)

נצה (*struggle*)

9) kî yinnāṣû ʾănāšîm yaḥdāw ʾîš wəʾāḥîw
when struggled men together one and another

2人の男達が互いに相争った時、 (Dt.25:11)

通常相互用法とされるのは 8), 9) のように複数形の主語が用いられている場合であるが、その解釈においては yaḥdāw (*together*) などの副詞句の役割も大きい。 Reflexive 用法と同様主語には動作主性が感じられる。しかしこれらの動詞の多くは、実際には 7) の例に見られるように当事者の一方のみを主語に立てて相手を前置詞句によって表現する構文でもしばしば用いられる。これは基本的に Reflexive と同じ構文である。このように、基本的に相互用法は Reflexive 用法に非常に近いものであり、 Reflexive 用法の中でも複数主語や、相互性を明示する副詞的表現の使用などによって動作の相互性が強調されたものが、ここでいう「相互用法」なのだと解釈することも可能であろう。

なお、 נועץ (Niph: *consult together*) の能動語幹は「助言する、アドバイスする」という意味の動詞 יעץ (Qal: *advise*) であるが、 Niph'al 構文の方は専ら「～に（と）相談する」という自動詞的意味で用いられている。主語に対して（「助言される」対象としての）被動者的立場を同時に感じ取ることができるかどうかは微妙である。一方 נצה (Niph: *struggle*) の能動語幹は Qal ではなく Hiph'il 語幹であるが、意味的には Niph'al 語幹と類似の意味で用いられており、態的な対立関係は不明瞭である。また נלחם (Niph: *fight*) は専らこの語幹においてのみ使用され、態対立の構図はやはりはっきりしない。

3．4．Benefactive 用法

Benefactive 用法としては שאל (Qal: *ask for*) の Niph'al 語幹があげられる。

נשאל ("*ask for permission*")

10) niš'ōl niš'al mimmennî ḏāwiḏ lārûṣ bêṯ leḥem ʿîrô
asked leave from me David to run (to) Bethlehem his city
ダビデは、自分の町ベツレヘムへ急いで帰ることを許してください．．．と頼み込んでいました。 (1S.20:6) ［新共同訳］

独立不定詞 (Infinitive Absolute) を前に置いた完了形が用いられている。通常この動詞は上記のように「賜暇を願い求める」という意味で訳されており、「（自分のために）願う」というギリシャ語の中間態 Middle Voice のような用法であるということで、この用法を指して Middle という用語を使う研究者もいる[13]。ギリシャ語七十人訳では上記の箇所は、

10') Παραιτούμενος παρῃτήϲατο ’α’ ’βοῦ Δαυιδ δραμεῖν ‘ὡϲ εἰϲ Βηθλεεμ τὴν πολιν αὐτοῦ,

のように訳されているが、ここで使われている παραιτέομαι も Deponentia 動詞として "*beg from another, ask as a favour of*" の意味を表わすとされる[14]。

上記のようにとらえた場合、ここでの Niph'al 語幹の意味は確かに基本語幹 (Qal) の「求める、尋ねる」の意味と近接しているように見える。このように基本語幹 (Qal) と Niph'al 語幹の意味が似通っていること自体は特に珍しいことではないが、それもたいていは基本語幹が自動詞的意味を持っている場合であり、他動詞的意味と近接した上記 Niph'al 語幹の用法は少し変わっている。

一方この動詞には使役語幹 (Hiph'il) もあり、「（求めに応じて）貸し与える、譲る」の意味があるとされる。 BDB でも "(prop. *let one ask* [successfully], *give*, *lend*, *on request*, then) *grant, make over to* (as a favour, with or without request)" というパラフレーズがされている[15]。仮にこの意味を上記 Niph'al 語幹の意味と対立するものとして考えることが可能であれば、同様にして「（要求の結果としての）許可を得る」という解釈も成り立つように思われるのだが、これに関しては出現数が少ないこともあり断定的な結論を出すことができない。

4．Niph'al 構文が表現する出来事の性質について

次に、上で検討した用法を中心に、 Niph'al 構文が表現している出来事の性質について個別に検討する。

まず Tolerative 用法についてであるが、上であげた動詞の基本語幹 (Qal) はどれも動作対象となる人間に何らかの働きかけ（警告、捜索など）を行なったり、あるいは何らかの仕方で相手の存在を知覚する（発見など）意味を持つものの、同時にそれは必ずしも相手への直接影響の到達を含意しない性質のものである、ということがまず指摘できる。すなわち、基本語幹が表わしているのは対象への影響の到達を必ずしも含意しない行為である。そのため、警告しさえすれば זהר (Qal: *warn*) という動作は成立するし、追求しさえすれば דרש (Qal: *seek*) したことになる。神に祈る意味を表わす עתר (Qal: *supplicate*) も同様である。もともと直接的な影響を相手に及ぼすような意味ではない上に、その働きかけを相手が受け入れるかどうかもこれらの動作の成立には無関係である。能動構文は基本的に動作主に焦点を当ててその行為を述べる構文であるから、その分被動者の側が背景に退いてしまったとしても不思議ではない。

しかしその一方で、追求や警告の対象を主語に据えた Niph'al 構文では、主語はそのような働きかけが何らかの形で実際に到達した対象として解釈できる場合が多い。これは決して Tolerative 構文にのみ見られる特徴ではなく、受動など他の構文においてもしばしば見られる性質である。以下にあげるのは זעק (*cry out*) という動詞における Qal, Niph'al, Hiph'il の各語幹の用例である。

זעק (Qal: *cry out*)

11) wayyizʿăqû　b̲ənê yiśrāʾēl　ʾel YHWH

and cried out　sons of Israel　to Yahweh

イスラエル人たちはヤハウェに（助けを求めて）叫んだ。(Ju.3:9)

נזעק (Niph'al: *be called together, assemble*)

12) wayyizzāʿăqû　k̲ŏl hāʿām　ʾăšer bāʿîr　lirdōp̄　ʾaḥărêhem

and were called together　all the people　who (were) in the city　to pursue　after them

都市の中にいた全ての民が彼らを追跡するために呼び集められた。(Jos.8:16)

הזעיק (Hiph'il: *call together*)

13) wayyazʿēq　sîsərāʾ　ʾet̲ k̲ŏl rik̲bô　təšaʿ mēʾôt̲ rek̲eb̲ barzel wəʾet̲ k̲ŏl hāʿām

and called together　Sisera　all of his chariots　900 iron chariots...

ʾăšer ʾittô mēḥărōšet̲ haggôyim ʾel naḥal qîšôn

シセラは彼の全ての戦車、すなわち９００の鉄製の戦車と彼とともにいた全ての民をハロシェト・ハゴイムからキションの川へといたるまで召集した。(Ju.4:13)

この動詞の基本語幹 (Qal) は単に叫ぶ、もしくは呼びかける意味を表わすが、対して使役語幹 (Hiph'il) は呼び集める、召集する意味を持っている。（使役語幹とはいえ、ここでの意味は「呼ばせる」「叫ばせる」などの通常の使役の意味ではないことに注意。）むしろ呼び掛けた相手をその召集に実際に応じさせるところまでをその意味範囲に含んでいると見られる。相手が応じた時点で初めて成立する動作を表わすという点において、この動作は特定の到達点（この場合は相手が召集に応じて集まった時点）への到達を成立条件にしていることになる。その意味において、ここで Hiph'il 構文が表わしている出来事は動作態的に見て telic である[16]。それに対して Qal は単に叫ぶ、呼び掛けるという、特定の到達点を想定しない動作を表わしており、その意味でここで Qal 構文が表わしている出来事は動作態的に見て atelic である。そしてさらに付け加えるとすれば、この動詞の Niph'al 語幹は、意味的にも態対立の点からも Qal 語幹とではなくこのHiph'il 語幹と密接に関連していることは明らかであろう。つまり、この動詞に関する限り Niph'al 構文における主語は単に呼び掛けられた存在としてではなく、むしろ（ Hiph'il 語幹によって表現される）召集という動作を実際に受けた、（そしてその見える結果として実際に召集にかり出された）存在として解釈されなければならない。その際、主語の側に自発性もしくは意志性が認められれば Reflexive 用法として解釈されるし、認められなければ受動的用法として解釈される[17]。

同様にして Tolerative 構文においても、動作態的に見て telic な出来事が表現されているという見方は可能であろう。上記の例を含め、これまで Tolerative 構文であると見なされてきた例文の中には少なからず否定文が含まれているが、このことからも分かるように、動

作主側がいくら追求、懲戒、警告等の行為を行なおうとも、 Niph'al 構文の主語の側にその行為の影響が実際に到達しない限り、そして主語がそれを自らの意志で受け入れるなり拒絶するなりしない限り、その文において Tolerative 解釈は成立し得ないのである。

さらに指摘するならば、いわゆる Benefactive 用法の例とされている נִשְׁאַל (Niph: "*ask for oneself*") に関しても、同様に Hiph'il 語幹との関連で捉え直してみる必要があろう。この点で Hiph'il 語幹 (הִשְׁאִיל) の意味を BDB が "*let one ask* [successfully]" とパラフレーズしていることは示唆的であり、派生語幹がともに telic な意味を持っている可能性はこういった点からも伺い知ることができるように思われる[18]。

もちろん、主語と動作とのこのような関係性は、他の動詞においては全く異なった様相を示すことも十分にあり得る。本稿で検討した動詞の多くにおいては、基本語幹 (Qal) が atelic な状況を表わしていたが、基本語幹自体がすでに telic な状況を表わしている場合や、能動語幹が自動詞的意味を持っている場合などについても別途検討が必要であろう[19]。また動詞の語義自体、意味の拡張、縮小等を含めて様々な意味変化を長い期間のうちにすでに経ていることは想像に難くない。聖書というテキスト自体、具体的な成立過程の不明な様々な資料の集合体であるし、言語的な等質性なども望むべくもない状況である。加えて個人の文体によっても相違は起こりうる[20]。しかし、それでも語幹間の用法の相違を生み出してきた要因として、上で検討してきたような動作態的性質の違いが潜んでいる可能性は決して少なくないように思われる。これまでとかく文脈に依存するという側面ばかりが強調されてきた Niph'al 語幹の用法の多様性について、こういった語幹間の対立や、動詞もしくは文全体の表わす出来事の動作態的性質といった動詞意味論的観点からも改めて検討し直してみる必要性があるのではないだろうか。

注

1）Reflexive は通常「再帰」と訳されるが、本稿ではあえて翻訳せず Reflexive とのみ表記する。 Benefactive 及び Tolerative も同様。ただし Reciprocal だけは以下「相互」とする。

2）Moscati (1964), 16.15 pp.126-7., Lipiński (1997), 41.15.-41.19. pp.393-5. 参照。

3）Lipiński (1997), 41.15. p.393. 参照。

4）Moscati (1964), 16.15 p.126. 参照。

5）von Soden (1969), AnOr. 33. §90. pp.117-8. 及び AnOr. 47. §90. p.18**. を参照。

6）注 2 の文献を参照。

7）主語以外の関与者が目的語表示 אֵת を取ることは滅多にない。（あってもほぼ同形の別の前置詞 אֵת (with) として解釈されることがほとんどである。）たいていはそれ以外の前置詞が使用される。なお、主語に目的語表示が付加される現象が時に観察される。

8）Waltke & O'Connor (1990), 23.1.h. p.380. 参照。

9）それに近い構文として、右のような例文がよく取り上げられる。 hiššāmer ləḵā "keep yourself!" hiššāmer は動詞 שמר (keep) の Niph'al 語幹の命令形であり、それに主語と同一指示の人称代名詞が前置詞付きで後続している。

１０）ただ、この点で Waltke & O'Connor の "Double-Status" という用語は多分に誤解を招きかねない表現でもある。例文１で ʾel (*toward*) という方向の前置詞が使われていることからも分かるように、ここでの動作の方向性はあくまで Niph'al 主語から他へと向けられている。「自ら見られる」というパラフレーズも、語根本来の意味とそこからの意味的派生の過程を極力忠実に言語化しようとした試みに過ぎない。

１１）ここで言う態対立とは、単なる能動－受動の対立に留まらない、使役、 Reflexive 、相互、自発なども含めた、より広い概念と見てほしい。少なくとも、 Niph'al 語幹を単純に基本語幹の受動形と考えることはできない。なお Diakonoff (1965), p.87 によれば、共通セム語においては受動という文法範疇自体存在しなかったという。彼はそのかわりに能格システムの存在を想定している。能格との関連で Niph'al 語幹の機能を論じたものについては、他に Müller (1985/1995) をあげておくにとどめる。

１２） Joüon - Muraoka (1991) を参照。なお Waltke & O'Connor (1990) は意志性においてこの用法を受動と Reflexive の中間に位置付けている (*"half-willing"*) が、用例を見る限り必ずしもそういう文ばかりではない。 5) の例文をはじめとして、主語の明確な意志性を読み取ることのできる例は決して少なくはない。逆に否定文においては、行動を促されたにもかかわらずそれを意識的に拒否する意味合いを帯びる。

１３）Williams (1976), 136, p.27. 参照。

１４）Liddel & Scott (1889), p.596. 参照。ただし注１７も参照。

１５）BDB (1907), p.982. 参照。

１６）Telicity に関しては Comrie (1976), 2.2., pp.44-48. 参照。但し、ここではドイツ語の分離・非分離動詞におけるような語彙レベルでの Telicity をとりあえず念頭に置いている。

１７）なので、例えば שבר (*break*), כרת (*cut*), רפא (*heal*) などのように動作対象の側に意志性を想定しづらい動詞の Niph'al 語幹は Reflexive や Tolerative の意味を帯びにくい。

１８）興味深いことに、 נשאל (Niph'al) の翻訳に使用されたギリシャ語 παραιτέομαι も、作品によっては *"to move by entreaty, obtain leave from, prevail upon him by supplication"* という意味で使用されているらしい。 Liddel & Scott (1889), p.596. の語義説明参照。

１９）כרת (Qal: *cut off*) - נכרת (Niph: *be cut down*) - הכרית (Hiph: *destroy*) なども参照。

２０）例えば、エゼキエル書には比較的 Tolerative 構文が多く、また ענה (Qal: *answer*) のかわりに נענה (Niph: *answer*) を用いるなど興味深い現象も観察される。（Ez.14:4, 7. 参照。なお、他の書では נענה (Niph'al) は「返答を受ける」という受動の意味であり、能動の意味では Qal が用いられる。）エゼキエル書における נענה (Niph'al) は、能動的意味を持つにもかかわらず同時に Tolerative 的ニュアンスをも帯びている点が特に注目される。

参考文献

Bergsträsser, Gotthelf (1928) *Einführung in die semitischen Sprachen - Sprachproben und grammatische Skizzen*. München: Max Hueber Verlag.

Bicknell, Berinda Jean (1984) *Passives in Biblical Hebrew*. Ph.D. Doctoral Dissertation. The University of Michigan.

Brown, Francis., S. R. Driver & C. A. Briggs (1907) *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*. Oxford: Clarendon Press. ［本文中では BDB と略記］

Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge textbook in linguistics. Cambridge: Cambridge University Press.

Diakonoff, I. M. (1965) *Semito-Hamitic Languages: An Essay in Classification*. Moscow: Nauka.

Gesenius, Wilhelm (1910) *Gesenius' Hebrew Grammar*. edited and enlarged by E. Kautzsch. translated by A. E. Cowley. Oxford: Clarendon Press.

Joüon, Paul. S. J. (1991) *A Grammar of Biblical Hebrew*. translated and revised by T. Muraoka. subsidia biblica 14/I, II. Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblico.

Lambdin, Thomas O. (1971) *Introduction to Biblical Hebrew*. New York: Charles Scribner's Sons.

Liddell & Scott (1889) *An Intermediate Greek - English Lexicon*. Oxford: Clarendon Press.

Lipiński, Edward (1997) *Semitic Languages: Outline of a Comparative Grammar*. Orientalia Lovaniensia Analecta: 80. Leuven: Peeters.

三上宗一 (1999) 「古典ヘブライ語ニファル語幹の機能について　ー主語の意志性の観点からー」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第２０巻. pp.251-267.

Moscati, Sabatino et al. (1964) *An Introduction to the Comparative Grammar of the Semitic Languages: Phonology and Morphology*. Porta Linguarum Orientalium. Neue Serie: 6. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Müller, Hans-Peter (1985) "Ergativelemente im akkadischen umd althebräischen Verbalsystem". *Biblica*: 66. pp.385-417.

Müller, Hans-Peter (1995) "Ergative Constructions in Early Semitic Languages". *Journal of Near Eastern Studies*: Vol.54, No.4. pp.261-271.

von Soden, Wolfram (1969) *Grundriss der akkadischen Grammatik*. Analecta Orientalia: 33/47. Roma: Pontificium Institutum Biblico.

Waltke, B. Bruce. & M. O'Connor (1990) *An Introduction to Biblical Hebrew Syntax*. Winona Lake: Eisenbrauns.

Williams, Ronald J. (1976) *Hebrew Syntax: an Outline*. second edition. Toronto: University of Toronto Press.

（紙幅の都合上 Primary Source 、翻訳の出典並びに Abbreviations に関しては省略した。）